

菊池先生と浮津先生が学んだ仙台高等工業学校建築学科について

2009年に菊池謙先生にお会いしたとき、何か思うことがあったのか私に仙台工業専門学校（1944年に仙台高等工業学校から改称、SKKと略す）時代のことを話してくれました。浮津孝良先生もまた同校出身で、戦後宮城県の技術教育界に多くの人材を輩出しました。SKKに建築学科が加わったのは1930（昭和5）年のことで、開校に合わせて建築学科校舎が新築されました。この校舎建築は仙台大空襲の中で奇跡的に無傷で残り、2023年に補修を終えて国登録文化財に指定されました。浮津先生と菊池先生が誕生されてから、そしてこの建物が完成してからまもなく100年になろうとしており、皆様、仙台においでの際には、両先生に思いを馳せながらこの名建築を味わってみてはいかがでしょうか。

場所は東北大学片平キャンパスの南側にあり、かつてはSKKの他に第二高等学校、仙台医学専門学校、東北帝国大学（東北帝大と略す）が並んでいました。第二高等学校書庫（1910年、現文化財収蔵庫）、東北帝大付属図書館、（1926年竣工、現東北大学史料館）、同大機械学及び電気学教室（1930年、現東北大学多元物質科学研究所南1号館）などが現存していますが、その中でSKK建築学科棟のデザインは異彩を放っています。1921年から東北帝大の諸施設の営繕に当たっていたのが小倉強（1893-1980）で、仙台に生まれ第二高等学校を経て東京帝国大学で建築を学びました。1920年代新築の建物はほとんどが小倉の設計によるものですが、SKK建築学科建築については不明です。というのは、この建物が設計施工中の1929年、小倉はドイツに留学していたからで、帰国後SKK建築学科の初代教授となりました。私は小倉がヨーロッパから最新の建築デザイン手法を校舎設計者に助言していたのではないかと考えています。



その理由は、この建物には当時の日本にはまだなじみのない連続水平窓が用いられているからです。鉄筋コンクリート造によるラーメン構造躯体において、普通、教室に広い採光を取り入れるために柱間に大きな窓を入れるわけですが、この建物の場合、製図室のある2階一部と3階全部に水平窓が連続しており、柱形が現れてきません。外壁を外側に25センチメートルほど移したおかげで、連続水平窓とすることができたわけです。ル・コルビュジェが1920年代末にヴァイセンホーフ・ジードルングの住宅とサヴォア邸で用いたあのリボン・ウィンドウがここで使われています。現在はアルミサッシになっていますが、古い写真を見るともとは組子が入った木製の引違ガラス戸だったことがわかります。

外壁のスクラッチタイルは、1923年にフランク・ロイド・ライトが日本で初めて帝国ホテルに用いたものです。扁平アーチの1階中央が出入り口となっており、アーチ頂部には大きなテラコッタ製キーストーンが載り、仙台萩とSKKの紋章が出迎えてくれます。菊池先生も浮津先生も、心躍らせこのアーチ門をくぐったに違いありません。



菊池先生は昭和20年4月に入学したものの、すぐに仙台大空襲が始まり、授業はままなりませんでした。学科主任の小倉教授は、学生にSKK移転を設計課題として出され、菊池先生は築館の祖父の土地を候補地として推薦したそうです。7月頃、小倉教授と横山秀哉先生にその土地を見ていただいたところ、気に入っていただきSKKと菊池家の間で土地売買の話し合いが始まりました。しかし、その最

中の 8 月 14 日に終戦となり、移転計画は立ち消えになってしまいました。卒業後、しばし小倉先生の下で助手をしましたが、大変安い給料だったため、郷里の築館で中学校教師になることにしたというのが菊池先生からお聞きしたことです。それ以後の話は先生の年譜や回想録『T 定規』に書かれているとおりです。